

目玉

吉行淳之介

目玉

吉行淳之介

新潮社

目玉

(めだま)

印刷——一九八九年九月二〇日

発行——一九八九年九月二五日

著者——吉行淳之介（よしゆき・じゅんのすけ）

発行者——佐藤亮一

発行所——株式会社新潮社

所在地——162 東京都新宿区矢来町七一

電話——業務部(03)二六六—五一一
編集部(03)二六六—五四一

振替——東京四—八〇八

印刷所——大日本印刷株式会社

製本所——加藤製本株式会社

© Junnosuke Yoshiyuki 1989, Printed in Japan

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-324313-9 C0093

吉行淳之介短篇集・目玉・目次

大きい荷物

7

鋸山心中

31

目玉

59

鳩の糞

93

百閒の喘息

119

いのししの肉

141

葛飾

169

装幀 和田 誠

目

玉

大^{おお}き^きい^い荷^に物^{もつ}

一

病院の玄関のところにすると、空車が二台停まっていた。

これから、日比谷のホテルの地下アーケードに行くのだが、そこまではメーターの基本料金しか出ない。客待ちしているタクシーに乗ると、運転手は不機嫌になる。こちらでも居心地悪いし不愉快なので、通りまで歩いて流しの車を拾った。

このコースは、ときどき使う。途中の渋滞もないし、日比谷で私をおろせば、すぐにまた客を見付けることができるのだろう。これまでトラブルはなく、目的地に着くことができていた。

車のシートに腰をおろし、

「近くて悪いけど」

と、声をかけておいた。

虎ノ門の交叉点の赤信号で停まったとき、

「あーあ」

と、運転手が腹の底から絞り出すような溜息をついた。

タクシーに乗るといろんな目に遇うが、こういう生ま生ましい溜息を聞くのは、はじめてである。どういう種類のものか、分りかねる。

締め切った車中に、においが微かにただよっているのに気付いた。香水・葉巻・腋臭など、すぐに見当のつくものではない。化学薬品のおいとも、どうやら違う。薬物のおいにはどこかに割り切れたところがあるが、これは動物のおいのように絡まってくる。女性の体内の底のほうから滲んでくるにおいのようなものである。かすかに病んでいて、やや不快であるが、病気に伴う臭気とも違う。

走り出すと次の信号も赤に変わって、運転手はブレーキを踏み、

「チェッ」

と今度は露骨に舌打ちした。

かなり事態が分ってきた。瘦せた若い運転手は、膝のところにひろげた業務日誌に

記入しながら、呟いた。

「つづくときは、つづくもんだなあ」

これで、はっきりした。基本料金程度の客がつづくのを、嘆いているわけだ。ただし、客に当てつけている声ではなく、我が身の不幸を嘆いている声音である。客にたいする影響には気付いているのだろうか……、そんなことは頭にないようでもある。

車内のおいが、すこし濃くなって、いまでは悪臭といえる。

内幸町を左折して、日比谷の交叉点のほうへ向う。

「ホテルのところの信号を、右に曲りますか」

言葉づかいが丁寧なので、かえって落着かない。

「いや、信号のところで降ります」

あとは、広い道の横断歩道を向う側に渡ればいい。

二

腕時計を見ると、理髪店の予約時刻が迫っている。それは、病院を出たときには分

っていたのだが、運転手のせいで忘れていた。

信号が青になると、急ぎ足になって向う側に渡り、ホテルの横側の出入口の扉を押した。階段を降りて、地下アーケイドの奥まで歩き、理髪店の椅子に座った。

目の前の大きな鏡に映っている自分を見て、

「やれやれ」

と、おもう。

それは、いつものことだ。年を取ったし、いくつかの病気の気配も滲み出ている。それに、急いだからで心臓の鼓動がはやい。

理髪師の小山さんが近寄ってくるのが、鏡に映った。

「おや、息が苦しそうですね」

「わかるかね」

「肩が上下うへしたに動いてますよ」

「なるほど。それにしても、三カ月ぶりだ」

「まさか三カ月は経ってはいないでしょう」

「丁度、三カ月だ。うしろだけは長くなって鬱陶しいんだが、出てくるのが億劫で

ね」

長いつき合いなので、言葉遣いがいくぶん乱暴になる……。

小山さんは、私より二十は年下だろうが、去年の秋から眼鏡をかけるようになった。

「おや、老眼かね」

「いえいえ。でも、こまかい仕事ですからね」

「つまり、軽い老眼になったわけだ」

そのとき、そういう会話があったのを覚えている。

ホテルで仕事をしなくなってから、五年ほど経つ。その前の十年間は、一カ月のうちの半分くらいこのホテルにいた。

そのときに、小山さんを発見した。櫛と鋏だけで、短い時間に髪を整えてしまう。

その手早さと手際よさに、驚いた。

「ところで、お加減はいかがですか」

「駄目だ、半分死んでいる」

「またあ」

「あのね、黙ったままで刈ってくださいな。小山さんは、喋ると横のところを刈り過

ぎるんだ」

「そんなことないですよ、いつも丁度いい形になっているでしょう」

「散髪がおわったときに、鏡を見るとそうなっている、そこはプロだからね。ところが翌日になると、たちまち頭が坊ちゃん刈りになってしまう。六十半ばで、そういう髪型はないだろう」

そう言いながら、気付いたことが二つある。一つは、私が多弁になると小山さんも釣られて喋ってしまう、ということだ。もう一つ、動悸がつづいているのに、自分の声が出ている。

自分の声、という言い方は分りにくいだろう。一年半ほど前から、声がしやが震れることが起りはじめた。そういうときは、たいがい動悸がしているが、そうでないこともある。

目覚めてからでないと、その日の声の状態は分らない。そして、それには三つのケースがある。

一、朝から震れていて、波はあるにしても一日中それがつづく。

二、めったにないことだが、自分の声が就寝時までつづく。